
COLORs

ちやともん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COLORS

【Zコード】

Z6827M

【作者名】

ちやともん

【あらすじ】

ある世界に存在している数少ない学園。その中の一つに、一人の少年が入学してきた。少年が出会ったのは、赤茶の少年、空色の少女、深紅の少女、そして漆黒の少年。この四人こそ、学園で有名な少年少女たちであった。そして子供達は、それぞれに与えられた宿命に立ち向かっていく。

稚拙な文章ですが、暇があれば読んでみてください。

序章・世界の産ませし者

目を開けて

まわりを見回して

そして、自分を見た。

気付いたら、存在していた。

そして、自分の存在に気付いた。

何も覚えてない。

でも、なぜか不安はなかった。

こわいとは思わなかつた。

今の自分が、自分なのだと思つたのだ。

過去の自分に、恐怖は感じなかつた。

とつあえず、今のこの腹の減りをどうするのが第一だつた。

朝。

板張りの、広い小屋のようなその空間に、ブンッブンッと、風を切る音が響く。

一定間隔で振り下ろされる木刀は、普通のものより重く作られている。

少年は、その腕の見た目からは思えないほど、軽々と木刀で素振りをしていた。

かなり長い時間やっていたのだが、少年は汗ひとつかいになかった。

やがて、まだ薄暗かった空から口が頭をのぞかせ、辺りを照らしていく。

少年のいる空間にも、窓のような細かい木の隙間から優しい日の光
りが走つていった。

その日が少年の顔にかかると、少年は眩しそうに目を細め、自分を
突き刺す日差しを見上げた。

「……」

暖かい日差しに、思わずフツと笑みを浮かべる。

音もなく、まるで時が止まつたかのようだつた。

と、そこで不意に声をかけられた。

扉の方を見ると、桜色の髪をした少女が手を振つていた。

少年は返事をすると、少女の方へ歩み寄つた。

序章・高貴汚れし血

目の前で両親が殺された。

父は首を斬られて、母は心臓をひと突きにされて。

僕に向かい寄る影が大きくなつた時、突然目の前が明るく染まつた。

鋭く、それでいて暖かい光りが、僕を優しく包み込んだ。

その後の事はよく覚えていない。

気がついたら、僕はベッドに横たわっていた。

＊＊＊

視界に広がるのは、今まで内側からしか見たことのなかつたはずの、
壮大な建物。

まるで王族の住んでいるような城の形をしていて、大小様々な建物
がその周囲を囲っている。

この城のような建物は、この世界に一つしかない学校である。

世界に散らばるように位置しているこの学校は、所謂魔法学校だ。10歳から19歳まで、最高10年間、一般教養から魔法の知識まで学ぶことができるため、大きな街と言つていいほどの人数が各地から集まっている。

義務教育ではないが、かなりの遠方や辺境に住む者以外は、一番近くの学校に通うのが普通である。

通いの厳しい生徒のために学生寮も設置されているし、学校の周囲には勉学や実技に必要な道具、また、生活用品などを扱う店なども多い。

そのため“学園都市”と呼称されている。

学園都市の中央に佇む、一際大きい学校を目の前に、少年は翠の色をした大きな目を輝かせた。

「これが、今日からオレが通う、学校…」

やつらながら、少年は緊張した足びりで一歩を踏み出した。

朝のホームルームの始まりを告げる鐘が鳴つてもガヤガヤとしていた教室は、正面側の扉が開かれると同時に鎮静化していった。

素早い足どりで教卓にたどり着いたこのクラスの担任は、扇型に広がつて置かれている席に慌てて座りはじめた生徒たちをゆっくりと見回した。

このクラス担任の歳は30代で、この学校の男教師としてはかなり若い方である。

性格は穏やかだが、若いなりに熱血漢でもあり、授業内容も優秀なため、大半の生徒は彼を好いている。

男は全員が席につくのを見届けると、おはよつと一言あこがつした。

「今日からこのクラスに生徒が一人加わります。 入ってきて下さい」

担任が入ってきた扉の方を向く。

そこから、一人の小柄な少年がそろそろと出てきた。

ガチガチに緊張しながらも担任の隣まで歩いた少年は、翠色の目をキヨロキヨロと動かした。

その中で、赤茶色の髪をした一人の少年と目が合った。
一番後ろの席に座るその少年はウインクしながらひらひらと手を振つている。

それを視界にとらえた少年は、安心した様子で改めて正面を向いた。
精一杯の笑顔を浮かべて、大きな声で言つた。

「スイ、です！これからよろしく、お願ひします！」

勢いよく、礼をした。

クラスと言つても年齢や種族、入学した年はバラバラで、取る授業も必修科目以外は個々の自由である。

他の学校も違いはあるだろうが、同じようなものだ。

そのくらいの知識は前もつて聞いていたスイであつたが、友達に言われた通り大人しく担任のカーズの説明を受けた。

「 とまあ、こんなところですね。履修登録はいつでもいいですが、早めの方が正式に授業の出欠上よろしいですよ。とりあえずこの一週間、仮出席できますから」

「分かりました。ありがとうございます」

頭を下げるとい、カーズはニッコリと笑つて教室から出て行つた。

クラス教室と言つても、皆それとつている授業が違うので、連絡があつたり無かつたりする朝のホームルームや休憩室にしか使われない。

履修の説明を受けている間に、ほとんどの生徒は各自の授業に行つ

てしまった。

残っているのは自分を含め数人。

その内の一人 先程スイにウインクしてくれた、赤茶の髪色をした少年が近づいてきた。

「どう? 説明分かった?」

「アイザックの言つてたことまんまだつたからね。大丈夫」

「なら良かつた。じゃあ、どうする? どこ行きたい?」

赤茶色の少年 アイザックは、穏やかに笑いながらスイに尋ねた。当たり前のように聞いてくるアイザックに、スイはキヨトンと目を丸くした。

「アイザック、授業はいいの? じいちゃんに言われたからって、オレに付き合わなくともいいぞ」

「あいにく、今日の僕の授業は午後だけなんだ。スイに付き合つて るのも僕の意志。だから、気にしないで」

「そつか… ありがと、アイザック!」

純粹で無邪気なその笑顔は、まるで汚れを知らない幼子のよつだつ

た。

そんなスイを連れ、アイザックは教室を出ていった。

アイザックはブラブラと歩き周りながら説明をしてくれるが、正直広すぎて覚える気が全くしない。

最初は覚えようと試みたものの、途中で諦めた。

長い廊下を歩きながら、もし迷つてしまつたらと想像して、少しゾッとした。

そんなことを考えながら、次に着いたのは図書室だった。

多くの本が、隙間なく並んでいた。

巨大な本棚の間にはちらほら椅子や机が置かれ、そこで生徒たちが読書したり勉強したりしている。

「すつげえー！ いっぱい本があるぞ！ …」

「しゃーつー、図書室では静かに…！」

感動して思わず叫んでしまつたスイを、アイザックは小声で諫める。スイはこてんと首を傾げた。

「何で？」

「図書室は人が集中して本を読んだり勉強したりする場所なんだ。
誰かが大声出したら、集中できないでしょ？」

「そつか、そつか。分かった」

納得したのか、首をブンブンと縦に振るスイ。

アイザックはニコッと笑い　　そして、スイの後ろの椅子に座つて
いた少女に目を留めた。

「や、リコラス。授業無いんだつたつけ？」

アイザックが話し掛けた後ろの人物の方を、スイは振り返つてまじ
まじと見た。

晴れ渡つた空のような色をしたスカイブルーの髪に、同じく澄んだ
青い瞳。

肩までに切り揃えられていて、左だけちょこんと結ばれている。

「本当はあつたんだけどね。先生が授業前に準備してた途中、毒草に噛まれちゃつたらしくて休講。でもその代わりに課題出されちゃって」「

「最悪」と眉間にシワを寄せた少女は、そのまま聞いて、ようやくスイを見た。

そんな少女に、スイは思わずドキッとしてしまった。

「私は今クラス。今日うちのクラスに入ってきた子だよね。よろしく！」

「え、あ、うん… オレはスイ。よろしく、お願い、します」

スイはガチガチになりながらも、差し出された手を掴み、握手をした。

この学校は一般的な入学式といつものはあるが、個人的な事情についてそれに間に合わない者も多く、後々に入学していく者も少なくない。

始めから入学出来ない者の揃することと言つたら、人間関係か最初から授業を受けられないことくらいである。

とにかく、スイのよひこの時期の入学者といつのは、珍しいことではない。

図書室を出た三人は、廊下をゆっくり歩いていた。

「課題つての出てるんだろ？大丈夫なのか？」

「調べ物は終わつたし、後はまとめるだけだからね。帰つてからやるから、心配」無用！

「リコラスはこの授業割と得意らしいから、大丈夫だよ」

リコラスは先程まで持つていた資料の入つているカバンをパンパン叩いて、スイに親指を立ててグーサインをする。

アイザックの補足に「そつなんだ」とスクイズは、何の授業なのかリコラスに聞いた。

「“有毒植物のカード化”^4”だよ。カード化の授業だから人気ないことはないんだけど、植物だしレベルも高い方だから、人そんなにいないよ」

「レベルって…」

「レベルは下が1から上が5まであってね、私は4だから…中の上つてところ、かな」

「一般的に2か3まで取れればいいんだけど、もっと学びたいって人が4、5を取るんだ」

単位を取る毎にレベルアップするのだが、止めるのはいつでもいい。合わないと思う授業は直ぐに辞めてもいいのだ。

しかしその場合、授業の単位が取れない。

単位はイコールこの世界の資格のようなものなので、重要なのだ。

「カード化には専用の陣が書けなくちゃいけないから、スクイズはそこからだね」

「確かにそれって一週間くらいで取れるよね。じゃあ、授業一個決定

」
「お、おつー

勝手に進んでいく話に相槌をつつスイは、その授業の名前をメモした。

そういうじている内に着いたのは、広いグラウンドだった。

ドオオーンっという音が、広いグラウンドに響いていた。

スイがその破壊音に顔を向けると、大きな人だかりができていた。

リコラスが何かに気付いたのか、「ああ、そつか」と両手をポンとたたいた。

「今日“カード使役実践”LV5”だつたね～。イーザがいる！」
「にしても人数多いなあ。LV5取つてるので10人ちょっとく
らいじやなかつたつけ」

「16人だよ。他はギャラリー。LV5はハイレベルだから、皆よ
く見に来てるんだよ。ていうか、観戦しに来てる」

「まあ、面白いっちゃ面白いだろうね～」

「なあ、なあ！イーザって誰だ？全然話に着いてけないんだけど」

二人だけでどんどん盛り上がりしていくのに、スイはストップをかけ
る。

イーザという人のことはもちろん分からぬ。

完全に戸惑った様子のスイに、一人は「ごめんごめん」と謝る。

リコラスは人だかりの中心を指差した。

「あそこ、たぶん今戦つてるのがイーザ。雷系の使役ができる人つてこの学校じゃ限られてるの」

「雷と相性合う人は少ないんだよ。僕らもせいぜいLV2、3くらいい」

「どうせ私はLV2よ！ どうせ去年落ちたわよ！」

「リコラスは雷系との相性壊滅的だからね。LV2が取れただけでもいいじゃないか」

アイザックがキャンキャンと吠えるリコラスを宥め、三人は人々の塊に歩み寄つて行つた。

人の間を搔き分け、無理矢理最前列までたどり着いた。

人ばかりの中心にいたのは、学生一人に審判らしい教員一人だった。

学生一人は向かい合い、互いを睨んでいる　と言つても、片方は余裕そうに口角をつりあげている。

アイザックは、楽しそうに顔を歪ませた少女を指差した。

「あれがイーザだよ。あの悪役っぽそつなやつ
「だあれが悪役じゃあーーー！」

普通なら聞こえないような距離なのに、イーザと紹介された少女には完全に聞こえていたらしい。

授業そっちのけで、ずんずんとこちらに歩み寄つて来る。もともとツリ目だったイーザの目がさらにツリ目になり、血のよう

に真っ赤な瞳がその恐怖を搔きたてた。

まさに、魔王。

魔王はアイザックの前でピッタリと止まつた。

いつの間にか避難して板らしい観客たちがざわめいている。

スイヒラスも若干アイザックから離れた。

「貴様、このアタシがあの距離で聞こえないと思つたか？」

「思つてないけど、聞こえても問題無いと思つたし…感じたままでを言つたんだよ」

「貴様そんなに殺されたいかあーーー！」

そう叫ぶと同時に、イーザの右手がバチバチと放電しだした。
にも関わらず、アイザックはのんびりと指揮棒を振るうように指を動かす。

すると、アイザックの右手が一瞬光り、見るとそこには一枚のカードが握られていた。

アイザックがそつと呟く。

「ラ・デアラ ウオーリア」

「リボルド・アークス！！」

そして、歓声が響き渡った。

「二人は仲が悪いわけじゃないんだよ。じゃれあいが激しいだけで。それにお互いの実力を知ってるから、思い切りぶつかり合えるんだよ」

「じゃれあいって言わないでよ、気持ち悪い」

「そうだぞリコラス。スイと言ったか…アタシはこの鉄錆頭がいちいち腹の立つ発言をするから攻撃するんだ。アタシは悪くない」

「事実を言つてるだけなんだけどね」

「黙れ潰されたいか」

アイザックの頭が叩かれる、スパンという良い音が廊下に響いた。イーザの物凄い存在感に、スイは上手く喋れないでいた。

そんなスイの様子に気付いたのか、リコラスがスイの手を引っ張つた。

「イーザは良い人だよ。たまに怖いけどね　　あ、ここで最後だよ

」

一つの扉の前でリコラスは足を止めた。
午前中いっぱい校内見学をしていたが、この田の前の扉で最後なようだ。

田も畠ことじゅうまで上り、腹の減りがもうすぐ畠だと告げている。

「たぶん」
「あいつ」
がいるはずだから、そしたら昼ご飯を
食べに行こう

「あいつ……？」

アイザックの言葉に、リコラスとイーザは頷く。

しかし、一人スイだけは、
「あいつ」という誰かを知らない。
首を傾げた。

「ま、会つてからのお楽しみ! すぐに仲良くなれると想つよ~」

「いいやつだ。アタシも認めていい」

リコラスに続いて、イーザは腕を組みながら遠くを眺めるよつな田
で言った。

(そんなに、いい人なんだ)

その“あいつ”に興味を寄せながら、スイは扉に手をかけた。

(そんなに、周りの人必要とされてる人…)

自分がふつと目を細めたことに、スイは気付いていない。

扉の取つ手を握る手に、無意識に力が籠つた。

見た目より軽い扉を、スイはそつと開けた。

昼時に食堂が混まないわけはない。

そして、この学園は全校生徒だけでも街一つ分くらいの人数がいるのだ。

正直、こんなに簡単に席につけるとは思わなかつた。

「この食堂、校内でも3番目に広いからね。席があいてない日はないんだ」

「それに校外の近くにもレストランやら定食屋やらがあるからな。そっちの方に流れる者もいるのだ」

アイザックの言つ通り、かなり広い食堂だ。

3番目といつので、おそらく1、2番目は途中で見た演習場と校庭だろう。

最後に見た武道場もかなりの広さだった。

板張りの清潔感ある空間で、神聖な空間のように思えた。

だが

「にしても、肝心な“あいつ”はどこに行つたんだろうねー」

「今日は確か“槍術”的授業があつたはずなんだけど…」

「だが、見たところ授業自体がすでにやってなかつたように思われるぞ」

リコラスの言つた初めて聞く“そうじゅつ”という単語が少し気になりつつ、スイはイーザの言い分に大きく頷いた。

武道場に入つたはいいが、肝心の“あいつ”という人物どころか人っ子一人いなかつた。

少し楽しみにしていたので、正直ガッカリだつた。

「まあ、そんなに落ち込まないで」

「別に、そんな、落ち込んでなんかつ」

「いやいや、あからさまにガッカリしてたよ…」

図星をつかれたスイはムキになるが、リコラスはもちろん、他の二人にも簡単に分かつた。

例の“あいつ”に会えなかつた4人は、諦めて食堂に来ている。いつもは例の“あいつ”と4人で食べていたらしいのだが、その代わりに自分がいることが少し申し訳なく思えた。

また少し落ち込み始めているスイを見ながら、その隣にいたアイザックはテーブルに肘をついた。

「もしかしたら、食堂で会えるかもしないよ。いつも面はここ

で食べてるし、時間もこんなくらいだしね」と

「いたところで申すの困難」「けられた心奇跡だな」と

「たまにと、今サハ」

何たやるのか、この前の決着つけようか?

卷之三

いつの間にか勝手に騒がしくなつていく友人たち。スイはどうすることもできずただ客觀することにした。

実は腹がかなり減つてゐるのだが、いまいち仕組みが分からぬ。そのため、3人が落ち着いてくれるのをじつと待つ。

が、早々に力尽き、額をテーブルに乗せた。

入ってきた。

すると突然、ぽんつと肩に手を置かれた。

声は何とか上げなかつたものの、思わず肩が震えた。

「大丈夫か？」

「お、おう… あ…」

重い頭をゆっくり上げて、最初に視界に入ってきたのは、夕闇のよう
うな漆黒の髪であった。

この世界で、黒田黒髪というのはどの種族においても珍しい。そのことをスイは知らないが、初めて見るその色にただ感嘆していた。

「つたぐ、騒がしいやつらだよな。…昼飯、食つたのか？」

「……」

「おーい」

「……」

「……、えつ、何？」

「あつ、『めつ』」

無意識のうちに、その黒い髪に触れていた。

スイは伸ばした手を慌てて引つ込め、すぐに謝つた。

少年は恥ずかしさに俯くスイを見て、穏やかに微笑んだ。

「いい、気にすんな。珍しいかんな、こんな色。初対面で髪触られ

たのは初めてだけど」

「いや、その、本当悪かつたって。初めて見る色だつたから
「おもしろいな、お前！：俺はカイヤ。カイでいい。お前は？」

少年 カイヤは、手を前に突き出した。

スイはそれを見て、その手を握った。

カイヤの漆黒の瞳を、その翠の瞳で見つめた。

「オレは、スイ。今日、この学園の生徒になつたんだ。よろしくー。
「ああ、よろしくな」

握り合つ手に、しっかりと力がこもつた。

その後ろでは、3人の男女が未だに言い争つていた。

「 で、今に至つてた
「 …大変そうだつたな」

スイは今までの経路を話ながら、昼食の乗つたお盆を持って席に戻つていた。

3人があまりにも長く言い争うので、昼食を取りに行く途中だつた
カイヤと一緒に行くことにした。
3人は全く気付いていなかつた。

「あいつらもひでえなあ。新入生ほつたらかすなんて」

「本当、助かつたよカイヤ」

「…ま、俺が原因みたいなものだし…」

カイヤががぼそつと何かを言つた気がしたが、空耳かと思い、特に何
も言わなかつた。

歩く間に、武道場で会えなかつた例の“あいつ”に思いを馳せる。

今はカイヤがいるから、不満は全くない。

でも、例の“あいつ”がどんな人物なのか、単純に気になつた。

「見てみたいなー」

「それって、例の“あいつ”？」

「うん。なんかこう、もやもやつてする

「特徴とか聞いてないのか？」

「会つてからのお楽しみだーって、教えてくんないんだ！：あ、力
イヤ知つてたりする？あいつらと仲いいヤツ」

むくれてているスイに尋ねられ、カイヤは困ったように笑った。

「た、たぶん」

「まじかっ！？な、な！教えてくれよー」

「そいつってたぶん

「

「あー、カイ！！」

カイヤの言葉を遮つて、進行方向からカイヤの名を呼ぶ声が上がつた。

見ると、リコラスがこちらを指差していた。
正確に言えば、カイヤを。

「え、知り合いだったのか！？」

「知り合いつていうか…」

アイザックとイーザを席に置いて、リコラスが小走りで駆け寄つた。カイヤは頬をポリポリかきながら、リコラスが近寄るのを眺めている。

「例の“あいつ”って、俺のことだよ」

「え…？」

「お前が知りたがっていたのは、俺のことだ」

「カ・イ・ヤー！」

突つ込んできそうな勢いだが、ギリギリのところで踏み止まつた。

カイヤと同じくらいの身長なのに、下から覗き込むような体制なので上目遣いだった。

「まつたく、どこ行つてたのよー。今日つて“槍術”じゃなかつたつけ？」

「午前中は軍に呼び出されてるから、今日は午後に変更。午後だつたらいつでもいいって」

「今日つてカイ、“ダガー”もなかつたつけ？大丈夫なの？」

“ダガー”は人数少ないからすぐ終わるし、“槍術”も時間は決まってない。被んねーよ

いや、私は体力的な方をね……あ、スイ

取り残されたスイは、啞然としていた。

それを見つけたりコラスは、今度はスイの方に向き直った。

「彼、カイヤ！噂の“あいつ”！…あれ、もう知り合ってた？」

どうやら、聞き間違えではなかつたようだ。

カード

この世界には魔法というものがあり、そして、全ての生き物に魔力が宿っている。

しかし、人間は魔獣や魔物、エルフや魔族に比べると、魔力は極端に低い。

加えて、人間自体が放てる魔法はあまり威力がない。

人間は非力である。

しかし、人間には他にはない頭脳がある。

人間は足りない力を補うため、頭を使つた。

そして、カードを生み出した。

カードは魔力の低い、人間だけの技術である。

もちろん他のものもやううと思えばできるのだが、できる頭脳を持つのが人間だけなのだ。

カード化は相手の魔力が人間より高い必要がある。

と言つても、人間より魔力が小さいものは無いに等しい。

そのため、人間をカード化することは不可能である。

そしてカード化するには、自分専用の陣が必要であり、それを空中に魔力で描くとカード化が可能となる。

カード化は少し時間がかかり相手は抵抗ができるので、ある程度相手が弱つてからカード化するのが通常である。

カードの使役には、2種類の道がある。

一つは、持つているカード化されたものの特性や魔法の使役である。

これは、陣の出し、自分専用のコードを唱えると使える。

もう一つは、カード化したもの自体の呪喚である。

これは、陣とコードに加えて、カード化したものの名前を呼ぶ必要がある。

名前は一般名刺でもいいのだが、名付けるのが一般的なので名付けた名前を呼ぶ者が多い。

どちらも使役者の魔力を使うので、カードの力もあるが、魔力次第で強くも弱くもなる。

魔力は潜在的なところが大きいが、增量は可能だ。

それは、魔力を使うこと。

そのため、生徒は日々勉強や実践練習に励んでいる。

見に行ひゆ

昼食を摂つた5人は少しの間話をしていたが、午後の授業を控えたアイザックヒーザが食堂で別れた。

今は残つた三人で廊下を歩いていた。

「じゃあまだ履修する授業決めてないのか」「うん。てか、何があるかもまだよく分かんないんだよなー」「そういうや、担任に一覧表とか貰わなかつたのか?」

スイは頷く。

カイヤは呆れたようにため息をついた。

「あの野郎、忘れやがつたな…まあ、いいや。とりあえず、俺の授業見学するか?」「え、いいのか!?」「基本、履修しなくても学ぶことはできるんだ。ただそれだと正式じゃないから、単位は取れないけどな」

「うわ、今日入学してきたスイは、最初から授業を登録してないため、単位を取れるものが限られる。」

短期なのは、ほとんどが初心者用の授業なのだ。

「俺の受けたる実践系の授業はまだできないけど、参考にはなるだろ？」

「え、と、カイのこれから授業って何だっけ？」

「ダガー」だよ。スイ、行ってみなよ！」

リコラスの言葉に、スイは元気よく頷いた。

武器などは見たことはあるものの、使ったことはない。初めての経験に、心が躍る。

「そりゃ、じゃあ今から行くか」「おうー。」

スイは拳を突き上げた。

“ダガー”

図書館に忘れ物をしたりコラスと別れた一人は、すぐに演習場に行くことにした。

“ダガー”の授業は食堂から少し離れた演習場で行われている。

演習場は校内に複数有り、その中でも“ダガー”的演習場は小さい方であった。

小さいと言つても、軽く100人以上は入れそうではあるが。

演習場に入ると、そこにはすでに何人か生徒がいた。

「本当は武器とか体術の授業にも、たいていの授業と同じでレベルがあるんだ。でもレベルの高いヤツを参考にするために、全員一緒にやるんだ」

「へえ、じゃあオレは」→「からかあ…カイは“ダガー”得意なの

か?」

「んー…」

少し間をとつて、カイヤは答えた。

「ダガー 자체は嫌いじゃないんだけど、得意つてわけじゃないな。軽いし小回りがきくから、スイに合うかもな」

実際に見てみて決めな、とカイヤは続けた。

そこで、扉が大きな音をたてて、乱暴に開かれた。

驚きでスイの肩は大きく揺れ、対しカイヤは慣れているのか、全く動じずにただ扉の方を見ていた。

いつの間にか増えていた生徒たちも、スイのような驚きは見せない。

注目される中入ってきたのは、ひょろ長い蛇のような男だった。

男は何事もなかつたかのように、生徒たちの中を突き進んで行く。ある程度まで進んで、突然止まった。

「ああああ、始めよつかーー！」

大きく手をたたいて、大声でそう叫んだ。

あまりの声量にスイは眉間にシワをよせ、両手で耳を塞いでいた。

他の生徒も何人か耳を塞いでいるが、カイヤを含めほぼ全員が全く動じていない。

もはや、慣れっこなようだ。

「“ダガー”のセバイユ先生。他に“歴史”的授業も担当しているんだ」

「声でけえな…」

「おかげで、“歴史”は未だ寝ているヤツはないぜ」

だろうな、とスイは頷いた。

「それじゃあ今日も、実践訓練！！」✓1の子は型を覚えてずいぶん慣れてきたようだし、一緒にやってみよっ……」

セバイユは楽しそうにしゃつ叫ぶと、生徒たちをレベルごとに分けた。

スイはとりあえず、カイヤの近くにいることにした。
カイヤがいるところの生徒は、他のレベルの集団よりもともと全体の人数が少ないと、そこまで田立なかつた。

セバイユはその細長い体をくねらせ歩きながら、二人組を作るよう^に言つてまわつていた。

そして、どんどん近づいてくる。

「や、皆おまたせ！……君らは普通の訓練慣れてるだらうし、今日はペアになつた人とチームになつて、一対一をしようか……」

「えー、マジかよー」

「この人数で一対一とか、時間的に絶対リュウジンと当たるじゃねーか」

「先に組んだもん勝ちだな」

聞き慣れない人名があつたが、とりあえず周囲の生徒はその人との対戦がとてもなく嫌なようだ。隣にいるカイヤも嫌なのだろうかと思い見てみると、特に変わった様子はない。

「カイは、他の皆が言つてるヤツのこと、怖くねーのか？」

「ん? 別に、怖くないけど……あ、先生」

「え…うわっ！？」

振り返ると、スイの後ろにはセバイユが不気味に立つていた。

セバイユの高い背は、小柄なスイを見下ろすには簡単な程だった。

スイは思わず声を上げていた。

その反応を見たセバイユは、不機嫌に口を膨らませた。ハツキリ言つて、気持ち悪い。

「そんなに驚かないでよ、失礼しちゃうな～！～」
「す、すんません…」

「それよりキミ、見たことないな～！～この授業とつてた～？つい
うか、さすがにこのレベルの生徒は覚えてるんだけどな～！」

「コイツ、今日入ってきたばっかで

「ま、いいや！～じゃあカイヤくんと組みなさい！～カイヤくんと
仲良也會うだし…！」

カイヤの説明を遮つて勝手に話を進めるセバイコに、二人は呆然と
する。

反論しようにも、セバイコはさつさと行つてしまつていた。

二人は互いに顔を見合させて、ため息をついた。

実践訓練が始まった。

配給されたダガーは皆同じサイズで、初めて武器を持ったスイは、それを少し重く感じた。

突然決まったことだが、スイは少しワクワクしていた。それを横から見ていたカイヤは、ダガーを器用に回しながらフツヒツと笑う。

「楽しそうだな」

「分かる？」

「見るからには。おもつきし顔に出てる」

「…」こういうの、初めてだからさ。怖いってのもあるけど、それ以上に楽しみだ！」

「初めてが、このレベルか…ま、俺がカバーするから、テキトーにやってみ」

スイは大きく頷いて、カイヤの前に出た。

相手は一人とも青年で、カイヤよりもずっと背が高い。
片方はスキンヘッドで体格がよい。

相手の二人組はスイの行動を警戒して、お互い間隔をあけている。

そこで、やつとセバイユの合図がかかった。

「さあ、始め——！——！」

それと同時に、皆が一斉に動き出した。

スイは、雄叫びを上げながら、相手方に突っ込んでいった。

ダガーを横一文字に振るが、簡単にかわされてしまう。
横に避けたスキンヘッドを追いかけるように、スイは第一撃をくりだした。

今度はダガーを突くように前に出す。

だがそれも刃を逸らすように流され、バランスを崩したスイは床に倒れ込んでしまう。

スキンヘッドはそれを見て、馬鹿にするかのように笑った。

「アイツと組んでるからどんなヤツかと思ったが…お前、全くの素人じゃねえかー！ビビらせやがって」

倒れたスイを踏み付けようと、男が足を振り上げだ。

容赦なく落とされるその足を、スイは何とか転がり避ける。そして、そのまま立ち上がった。

「はは、猿みてーな野郎だな！おひつ」

使い慣れているのか、ダガーを器用に振る。

体に似合わず細かく操られるダガーは、スイがギリギリ避けられるように風をきる。

スイが逃げるのを楽しんでいるのだ。

「最初の勢いはどつした、ガキ！！」

「へっ……あ……！」

スイはただの初心者で、特別な力があるわけではない。

ましてや、ダガーどころか武器自体初めて持つスイに、勝つ術は無いと言つても過言ではない。

そして、ダガーを避けたスイは、とうとう足を躓かせてしまった。

尻をついて転んだとこひるを、足でさらりと仰向けに押し倒された。ダガーを持つてゐる方の肩を勢いよく踏み付けられたスイは、背中をしたたかに打ち、咳込む。

その際、持つていたダガーを遠くに弾かれてしまった。

「どうやら終わりみたいだなあ。へへ、楽しかつたぜ」

「う…このやろつ」

「お前にや俺様をどうこうするこたあできねえよ！安心しな、このダガーは訓練用だから切つても傷はできねーよつになつてゐ。まあ

…」

男のダガーがスイの左腕を狙つた。

「痛みはあるけどなー」

「うああつー」

左腕にかつてないほど激痛が走り、スイは悲鳴をあげた。

その心にはすでに最初の好奇心はなく、恐怖だけが支配していた。

歯を食いしばって、泣きそうになりながら痛みに耐える。

それがまた楽しいのか、男は「ヤーヤ」と顔を歪ませた。

「俺の相方がアイツを阻止めにしてる間に、ゆづくついたぶつてやるよ」

男が再びダガーを振りかぶるところを見て、スイはグッと目をつむつた。

「セバイユせーんせ！」

「～おや、リコラスちゃんじゃないか！～久しぶり～！」

「相変わらずの声量で…」

耳に響くセバイユの声に若干顔をしかめつつ、できるだけ微笑む。

そんなリコラスの背を、嬉しそうにバンバンと叩いた。

「リコラスちゃんは“ダガーバー”でやめちゃったもんね～！～！
～4、挑戦しないの！？」

「う～ん、私ダガーハッてなかつたみたいで…今はカード系の方を
中心に授業を取っています」

「まあ、リコラスちゃん女の子だしね～！～それに噂だと、リコラス
ちゃんはカード系の成績が特に優秀らしいし～！」

「いえいえ、イーザには負けますよ～。…あ、そういえば、スイは
どうします？」

スイと一緒に授業見学でもしていようかと思つていたが、近くにス
イの姿はない。

しかし、知つてゐるだらうセバイユに聞いたものの、返答は思つて
いたものと違つていた。

「え、スイつて！？」

「…スイですよ～！見学で来てたでしょ、カイと」

「カイヤくんと！？え、知らないな～！…あ、そういうえ、ばカイヤくんの連れらしいのがいた気が…！」

「そ、それだよそれ！ていうか、先生か知らないって」とは、どこ行つたの…？」

と、そこでリ「ラスの田に映つたのは、スキンヘッドの男に踏み付けられているスイの姿だった。

「ス、スイ！？」

「え、何、見学者だつたのあの子！…？」

「あのスキンヘッド、アラガンじやん！何でスイがあんな危ないヤツと戦つてるの！？」

やつと真実を知つたセバイユが、どうしようつと顔を曇らせた。

「アラガンくんは自分より弱い相手をいたぶる趣味があるから、見学者なんて素人、ひとたまりもない…！」

「早く助けないと、せんせ…あ」

アラガンが、再びダガーを振りかぶった。

リコラスは、思わず目をつむってしまった。

スイもリコラスもそつと皿を開けると、想像したのとは違つ展開が広がつていた。

そして、それはアラガンにとつても。

「素人いたぶつて、そんなに楽しいかよ、アラガン」「り、『リュウジン』……！」

スイとアラガンの間に入つて、振り下ろされた刃を腕に受け止めていたのは、黒髪の少年だった。

スイは大きく目を見開いて、ゆつくりと少年の 友達の名を読んだ。

「カイ、ヤ……！」
「『めんな、スイ。足止めくらつてたんだ』

本当に申し訳なさそうに謝るカイヤに、スイは首をブンブンと横に振る。

小さな声で、何度もありがとうと呟いた。

そんなスイの頭を、カイヤはそっと撫でた。

「そんな……！ ザックはビリした！！」

「あの反則野郎？ あんなの、魔法使つたって俺には勝てねーよ！」

「あ、あいつは呪を使つたはず……！ てめえ潰すために習得したのに

つ

「あれ呪だつたのか。どうりでなかなか足止められるわけだ」

「つ、くつそおおあつ……！」

カイヤの腕に刺さつたダガーの刃を引き抜くと、アラガンは狂ったように飛び掛かってきた。

カイヤは全く動じないで、アラガンのダガーを持っていた自分のダガーで簡単に受け止めた。

体格差を感じさせないどころか、カイヤ優勢のように見える。

そして、その日に間違いはなかつたらしい。

「ぐああつーー。」

刃を受け止めてからのカイヤの動きは、川の流れのように無駄なく滑らかだった。

その動きに、スイはアラガンへの恐怖も忘れ、つい見惚れてしまつていた。

いつの間にかアラガンの背後に回り込んでいたカイヤは、ダガーを振り上げた。

「スイの借り、返してもいいはず

柄の部分で、アラガンの頭を勢いよく殴った。

『黒の龍神』

スイのケガは軽い打撲で済んだ。

しかし、アラガンのした行為が、スイのトラウマを生んだ。

スイは、気を失い倒れているアラガンにすら、恐怖を感じるようになってしまったのだ。

もう少し詳しく言つと、アラガンという存在そのものに。

カイヤの戦う姿に見惚れている間はアラガンへの恐怖を忘れることができたのだが、ケガを診てもらつていてるうちに、恐怖が振り返してきた。

「本当、ごめんな、スイ」

カイヤはスイのサポートをしようと思っていた。

先に行つてしまつたスイの後ろでアラガンにダガーを放ち、そこで出来るだらう隙を攻撃させようと思っていた。

しかし、スイの後ろについた瞬間、その間にアラガンとペアを組ん

でいたザックという青年が割り込んできたのだ。

それだけなら、全く問題はない。

カイヤなら、本気を出すまでもなく、彼を倒すことが可能だからだ。

ただ、今日のザックは違っていた。

ダガー以外の力どころか、厄介なことに呪を放つてきたのだ。

呪はくらうつまでどんな力を持つているか分からぬし、一度くらうつてしまふと解呪する必要がある。

解呪とは文字通り、呪を解くことで、解呪しなければ、呪は体に残り、侵食していく。

そして、一般に解呪には時間がかかる。

だからこそ、呪は避ける必要があった。

「ザックが呪を使うなんて、全く考えてなかつた。油断してた。だから、助けに行くのが遅れたんだ……だから、ごめん」

俯いているスイに、カイヤは頭を深く下げた。

それに気付いたスイは、慌てカイヤの顔を上げさせた。

「ち、違うよ、カイ……お、オレが勝手に仕掛けたんだし、オレが

悪いんだって……！」

「いや、初心者なの知つて前に行かせたんだ。じつにかできると思つていた、俺の慢心が生んだ結果　」

「違うよおお――――――！」

今までで一番大きな声で言葉を遮られ、さすがのカイヤも耳を塞いだ。

塞ぎ遅れたスイは、頭がぐわんぐわんと揺れるのをじつじつと出来なかつた。

「ワタシのせいだよ、カイヤくん……！ワタシが無理に授業に参加させたから……！しかも、Ｌｖ5の生徒と……！」

「あの一人には、後できつつい罰則を下さるからね……！」

セバイユは、ただの見学者であつたはずの少年を、レベルの高い者、特にアラガンと戦わせてしまつたことを、本当に申し訳なく思つていた。

そう叫びながら手を振るセバヒュを背に、三人は演習場を出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6827m/>

COLORs

2010年10月15日23時59分発行